

## 自立を考える

今回の東日本大震災に関して、作家の曾野綾子氏は「現在のシステムは複雑で、総合的に見ないと日本は復興に向かって歩き出せない。そうした時代を生きる私たちは、国家やシステムを疑い、それらにあまり依存しないことだ。(略) 国家がすべて何とかしてくれると考えるのは違う。めいめいが自分で考え、行動する癖を身に着けることだ。」と述べています(4月9日付読売新聞)。

確かに、曾野氏のいうとおり、何でも国に依存するというのは問題だろうと思います。自分のことは自分で守る、というのが基本であることも分かります。しかし同時に、未曾有の国難にあたり国を当てにできないとすれば、それはそれで国民としては非常に悲しいことではないでしょうか。

被災地では、被災者の皆さんが大きな苦難に必死に耐えておられますし、そうした中で、既に多くの被災者が互いに協力しながら、復興に向け自ら立ち上がろうともしています。また、ボランティアはじめ民間の方々も大きな力を発揮し始めています。

しかし、国民に対して3・11後の新しい国家像を描き、復興への道筋を示すことは、国の大きな責任であり、また、国民はその点において国に期待せざるを得ません。

勿論、国民の側にも責任があることは当然です。

高福祉・高負担、低福祉・低負担という言葉があるように、医療、福祉、教育、就労など様々な課題に対して国に手厚い対応を求めるのであれば、それに見合う負担を負わなければなりません。国によりきめ細やかな対応を求めるということは、一面大きな政府を求めることにも繋がります。こうした議論から国民は耳を背けるわけにはいきません。

権利ばかりを主張して、結局は国に全てお任せ、ということであればとても自立しているとはいえません。

曾野氏は「国家に頼らず、自ら行動を」といっているのは、そういうことに対する警鐘だろうと思います。

ただそうはいっても、国民が国というものから離れて、個々ばらばらの行動を取ればいいというものでもないでしょう。ですから、国民は、自助・互助の精神を大事にしながら、同時に、国に対して働きかけ、動かしていくだけの主体的な意志と行動力を持つことが必要なのだと、私は考えています。

(塾頭 吉田 洋一)